

# 風のファイター

2006(平成18)年5月21日鑑賞(ホクテンザ1)

★★★★



監督・脚本=ヤン・ユノ/出演=ヤン・ドンゴン/平山あや/加藤雅也/チョン・テウ (エスピーオー配給/2004年韓国映画/122分)

……あのプロレスの「力道山」に続いて、あの極真空手の「大山倍達」がスクリーン上に登場！ 1971年に連載を開始した『空手バカ一代』は、司法試験の受験勉強の真っ最中であつたにもかかわらず、強く私の印象に残る迫力ある劇画だつた。雪山での修行の様子は想像を絶するもので、これは肉体的みならず心を鍛え、「克己心」を養うためのもの。こんな苛酷さに比べれば、「弱い自分がいた」などというのはもつてのほかだし、新司法試験も旧司法試験もチョロいもの……？ もっとも、アンディ・フグに続く選手が登場しなければ、「K-1」のリング上での劣勢挽回はとて……？

## ヤン・ドンゴンに注目！

この映画で極真空手の創始者、大山倍達ことチェ・ペダルを演じたのは、キム・ギドク監督の『受取人不明』(01年)で「ハーフ」の主人公チャングクを演じたヤン・ドンゴン。チャングクは、アメリカ基地の金網近くの「廃バス」で「犬商人」として生活する中で、人間の悲しみと苦悩を一身に背負つたような主人公だったが、そのチャングクを演じたヤン・ドンゴンが、この映画でも、悲しみ・怒り・絶望の中にどっぷりと浸っていく姿、そして野獣のような生き方に自分の身を置いていく姿を実に情感豊かに演じている。

プロレス映画『力道山』(04年)におけるソル・ギョングは、力道山を演じるために、体重を20kg以上増やしたとのことだったが、この極真空手映画では、そのような話はなさそう……？ とすると、ヤン・ドンゴンは、この映画のためにすごい訓練を受けたとしても、基本的には「地のまま」で、見事なアクション

シーンを……。

パンフレットによると、ヤン・ドンゲンは自らアルバム収録曲全曲の作詞をするほどのヒップホップのラッパーとしても熱狂的な支持を受けており、「21世紀型万能エンターテイナー」との異名を持っているとのこと。韓国の俳優陣にはすごい才能を持った人物がいるものだが、やはり、キム・ギドク監督が『受取人不明』の主演に抜擢したことによって、大きな成長をしたことはたしか……。

## 極真会館 VS 正道会館

この映画のラストには、大山倍達を創始者とする極真空手（極真会館）が世界中に広まり、今や全世界120カ国、1200万人の修行人口を誇っているとの字幕が流れ、彼の偉業を讃えている。1939年に朝鮮半島に生まれたチェ・ベダル少年は、密入国した日本で敗戦を迎え、絶望の淵の中で空手と出会った。そして、その修行の中、1994年に死亡するまでの間に彼が築いてきたものは、たしかにすごいものがある。

他方、大山倍達の孫弟子にあたる石井和義を館長として創設された団体が正道会館。正道会館は1993年からK-1グランプリを開催し、佐竹雅昭、角田信朗、武蔵らを世間に売り出すことに大成功した。しかし、正道会館の石井館長には、2002年12月、約2億円弱の脱税容疑で逮捕という衝撃が走り、2004年1月一審の東京地裁、2004年12月に二審の東京高裁とも有罪判決を受けている。さらに、2003年の大みそかの格闘イベント「イノキボンバイエ（猪木祭）」に暴力団が関与していたことや、この暴力団によって石井館長も恫喝されていたということまでニュースとして流された。これでは石井館長お気に入りの藤原紀香もそのとばっちりを避けるのに大変だろうと思うのだが、テレビに堂々と出て「解説」しているから、大したもの……？

## K-1の隆盛はめでたい限りだが……

今や「K-1」人気は完全に日本に定着した感があり、大みそかでも『紅白歌合戦』の視聴率をおびやかす存在に……？ 「K-1」には、ヘビー級を中心に世界各国のファイターが集まる「K-1 WORLD GP」と中量級選手による「K-1

WORLD MAX」の2つがある。日本人選手は、中量級では2003年に世界王者になった魔裟斗が大健闘だが、重量級では武蔵が1人孤軍奮闘しているものの、やはり全く歯が立たないのが現状。大相撲の元横綱曙も全く勝負にならず連戦連敗で、今やその存在すら危ない状態……？ こんな「K-1」初期の盛り上がり大きく寄与したのがピーター・アーツ、アンディ・フグ、アーネスト・ホーストの3人だが、そのアンディ・フグは正道会館出身のファイターで、1996年にはグランプリを獲得している。しかし、世界のファイターは次から次へと登場するもので、2000年まではアーネスト・ホーストが最多グランプリを誇っていたが、2001年以降は、マーク・ハントやレミー・ボンヤスキー、そしてセーム・シュルトなどパワー全盛の王者たちの世となり、正道会館は全く歯が立たないのが現状……。大山倍達も草葉のカゲで歯ざしりしているのでは……？

## 雪山での修行の姿にはただただ感動！

この映画の見どころの1つは、数々の「対決シーン」だが、それ以上に感動するのは、チェ・ベダルが1人雪の山中にこもって行く苛酷な修行の姿。所詮、生身の人間の身体だと思いつつも、ここまで鍛えたら、こんな人間離れしたことが本当にできるのかということ、まざまざと思ひ知らされること必至。自然の石を素手で割るという「一撃必殺」の極真空手の真髄は、まさにこの人間離れした苛酷な修行から生まれたもの。

左右の手の親指一本だけで腕立て伏せを何百回もやるという話は、梶原一騎原作、つのだじろう（途中から影山譲也）作画による『空手バカ一代』が『少年マガジン』で連載され始めた1971年頃から、まことしやかにうわさされていたが、この映画を観ればなるほど本当の話だということがよくわかる。

## 「弱い自分」に打ち勝つ心の鍛練は？

また、見逃してならないのは、この雪山での修行は体の鍛練ばかりではなく、精神の鍛練と一体だということ。つまり、こんな辛くて苦しい修行は誰だって途中でやめたくなるもの。「弱い自分がいた」というのは何も姉齒元一級建築士に限ったことではなく、すべての人間に共通のもの。したがって、大切なことは、

そんな弱い自分に打ち勝つ人間となるための心の鍛練。この「克己」のためにチェ・ペダルが山中でやったのは、人前にでられないようにするため、眉を片方ずつ剃り落とすこと。こんな彼の姿勢を観れば、身体の鍛練とともに、「弱い自分」に打ち勝つための心の鍛練にどれほどのウエイトをおいていたかが十分にわかるはず。

## 🎬 司法試験の勉強なんてチョロいもの……？

5月19日から、法科大学院卒業生向けの第1回新司法試験が実施され、2091名が受験し、約5割が合格するとの新聞報道が5月19日の夕刊で一斉になされた。他方、従来どおりの旧司法試験は、毎年合格枠が減らされ、今年は約500名程度となる見込み。私の娘も旧司法試験で今、必死に勉強しているが、このチェ・ペダルの鍛練ぶりを観れば、決してしんどいなどとは言えないはず。彼の努力に比べれば司法試験の勉強なんてチョロいもの……？ 人間の努力の極限の姿を1度、自分の目に焼きつけておくことは、本当に大切なことだと思うのだが……。

## 🎬 やっぱりナマのアクションが最高！

最近、ナマのアクションの迫力を感じさせてくれた「武侠」映画が、韓国映画では『武士 (MUSA)』(01年)、中国映画では『SEVEN SWORDS セブンソード (七剣)』(05年)の2本。逆に、美しいけれどもCGの限界(つまらなさ)を感じたのが、張藝謀監督チャン・イーモウの『HERO (英雄)』(02年)と『LOVERS (十面埋伏)』(04年)、そして陳凱歌監督チェン・カイコーの『PROMISE』(05年)。また「ここまでやるか韓流映画！」と思わず興奮させてくれたのが『力道山』だったが、この『風のファイター』もそれと同じ。チェ・ペダルが次々と対決していく相手は、現役の武道の有段者ばかりで、その総段数は1700段とのこと。したがってその1つ1つの対決シーンは、見どころがあり、間の抜けたテレビの試合より、こちらの方がよほど面白く、迫力満点……？

## 🎬 恋愛模様、師弟愛と友情のあり方は？

『力道山』での中谷美紀は力道山と夫婦となることができたものの、その苦勞

がかなり大きかったことは映画を観ればよくわかる……？ それに対してチェ・ペダルがアメリカ兵に襲われていた芸者、陽子（平山あや）を救ったことがきっかけで、この2人の間にはちょっとした恋愛模様が展開されていくが、所詮修行の道と恋の道は両立しえないもの。したがって、この映画の中では、その恋愛模様はちょうどほどよい程度に……。

他方、「お坊っチャマ」と呼ばれるチェ・ペダルが敗戦後の東京の池袋で再会した武道家のボムスおじさんとの師弟愛や、チェ・ペダルが密入国した時からずっとチェ・ペダルと行動をともしする「お調子モノ男」のジュンベ（チョン・テウ）との友情も、ちょうどほどよい程度にちりばめられている。チェ・ペダルの人間離れした修行の有り様と、手に汗握る対決シーンだけでは観客は疲れてしまう（？）から、その頃合いはちょうどいい加減……。

### 猛牛との対決シーンは、これが限度……？

大山倍達といえば、「ゴッドハンド」と「猛牛殺し」が代名詞……？ 『空手バカ一代』は私が大学を卒業した年である1971年から連載が始まったものだから、私が司法試験に没頭していた時期と重なる。しかし、なぜか今でもその劇画の断片的なシーンは私の頭の中に焼きついている。その最も印象的なものは、彼の柔道着（？）姿と空手特有のヒモを巻きつけた拳の姿。そして最大のハイライトは、猛牛の突進を受けとめて、その脳天への一撃でこれを殺してしまうシーンだが、これは劇画ならではの迫力あるタッチによって印象に残ったもの。しかし映画製作においては、いくらノーワイヤー、ノーCGといっても、さすがに本物の猛牛と人間を直接対決させるわけにはいかないから、猛牛との対決シーンはかなり映像処理上のテクニックを駆使したものに……？ しかしそれでも、この猛牛は角25センチ、体重700kgを超える本物とのことだし、それが彼に向かって突進してくる姿はそりゃ恐いもの。そして、その突進を後退しながらも受けとめ、角をつかんでその脳天に……。さて、これは一体どんな風に撮影したのだろうか……？

### 『力道山』と『風のファイター』との差別は……？

『力道山』には中谷美紀が共演しており、日本でもかなりの宣伝がなされたが、

この『風のファイター』は平山あやが共演し、2004年夏に韓国で大ヒットしたものの。そして日本では今回が初公開だが、その宣伝はほとんどないうえ、大阪では4月15日に新しくオープンした「シネマート心斎橋」と「ホクテンザ1」のみの上映と大きな差別が……。

シネマート心斎橋は韓流映画を中心としたおしゃれな雰囲気では若者客を狙っている映画館。しかし、ホクテンザはそれとは全く異質の、昔からある場末の映画館で、地下1階にはピンク映画専用の映画館もある完全におじさん専用の映画館……？これはひとえに興行システム上の問題だが、もう少し何とかならないの……？

2006(平成18)年5月22日記

ミニコラム

### 今年も大晦日の真剣勝負に期待！

去る10月26日『力道山』にも登場していた「原爆頭突き」で有名な大木金太郎が死亡した。その直接の死因は心臓麻痺だが、頭突きの後遺症による脳血管疾患で長い間苦しんでいたから、現役時代のムリな頭突き技がたたったことは明らか。こんな事実を見ると、「プロレスはショーだ、やらせだ」と頭からバカにする主張には賛成できないが、昨今の格闘技戦において、ワクワクする試合に出会えないのは実に残念。その大きな原因は、24時間垂れ流し状態となっているテレビのバラエティー化にあることは明らかだが、選手たちもそれに甘んじているのでは？

そんなシラケを助長させたのが、疑惑判定で国民的関心呼んだ8月2日

の亀田興毅 VS ランダエタ戦。他方多くの日本人は、今年夏の甲子園における斎藤佑樹の早実 VS 田中将大の駒大苦小牧の延長引き分け再試合に真剣勝負の醍醐味を味わったはず。亀田の対ランダエタ再試合の興味が失ってしまった今、真に感動を与えてくれる格闘技の真剣勝負は今年も大晦日に行われる「K-1」と「PRIDE 男祭り」の試合しかない。04年の魔娑斗 VS 山本KID戦やヒョードル VS ノゲイラ戦そして05年のセーム・シュルト VS アーネスト・ホースト戦や吉田秀彦 VS 小川直也戦のような、思わず身を乗り出すような熱戦を今年も大いに期待したいが……。

2006(平成18)年11月22日記